異本『傾城佛の原』

異本「佛の原」は、故内田魯庵氏の愛藏本であつた。氏の發病直前に、緣あつてこの「佛の原」を私の文庫に加へることが出來た。この狂言本は、私が明治四十五年の正月？に、「從吾所好」のコロタイプ版の印刷を引受けてゐた矢吹高尙堂の工場でその目錄を見た以來、强く私の心を引いた珍籍であつた。それが約二十年近くを經た今日私の文庫に入つたので、愛翫措く能はず、日夕机邊において親しんでゐると、魯庵氏の發病の報が傳つた、しかも氏の病が私の宿痾と同じである。そして氏は遂に逝かれた。ところが「從吾所好」を印刷した矢吹時中君が、氏の逝去通知の繪ハガキの繪を氏自ら生前に撰擇されたのであるといふ事、そしてその印刷を矢吹君が、逝去後苦心をして氏好みに印刷したといふことを報じてくれた。――その夕、私は「佛の原」の佛といふ字の緣によつてこの拙い一文を、魯庵氏の靈に捧ぐる意で筆を執つた。

私が氏を知つたのは、もう二十三年の昔、「日本」新聞に私がゐた頃、何かの社の用向で牛込砂土原町のお宅を訪ねた、社用はもう忘れたが、恰も私が持つてゐた洒落本の「美地の蠣殼」から話が初つて典籍談で、編輯の締切も何もかも忘れてしまつたほど長座話込んだことを想出す。「美地の蠣殼」に初つて「佛の原」に終つた私の氏に對する想出のためにも、この一文を氏の靈に捧げたい。

「傾城佛の原」といふと、今日では誰でも近松門左衞門の歌舞伎狂言である事を知つてゐよう。明治四十四年五月六合館から發行した「近松脚本集」で、私は貪るが如くに、近松作の狂言集で

讀んだ記憶がある。これは高野博士と故南茂樹氏の校訂であつたが、今日では同じ六合館から、高野辰之博士の「近松歌舞伎狂言集」に收錄され、しかも今日の脚本の體裁に至極讀み易く高野博士の苦心の校訂があるから、說明するまでもないが、この近松の「傾城佛の原」は、元祿十二年正月廿四日を初日として京の都萬太夫座で上演された、座本は坂田藤十郎で、立役柴崎林左衞門。

京の坂田藤十郎が、「傾城江戸櫻」で、江戸の名優中村七三郎の初下りの「傾城淺間嶽」に拮抗して見事敗北した。都萬太夫座が、更に七三郎に對して趣向に心を碎いて藤十郎に演ぜしめたものが、この「傾城佛の原」で、萬太夫座は二年間の不入を「佛の原」で取返へしたといふ評判の狂言である。

藤十郎のためにも、名譽のいろいろな逸話を殘した、塵耳集などに傳ふる佳話が多い。作者の近松門左衞門も趣向には、餘はど人知れず縷心彫骨、內々自らたのむところがあつたらしい。世評もよかつたし、物質的にも藤十郎は、この狂言で、家藏が出來たのだ。

この近松門左衞門の「傾城佛の原」のあることを人は知つてゐるが、異本「傾城佛の原」については餘りに人は知らない。

私が異本といふ「けいせい佛の原」は、大阪嵐三右衞門座の狂言本である。そして作者は水島四郎兵衞とある。

狂言本としての異つた點を表にして示すと、

「佛の原」「異本佛の原」　座　京都萬太夫座　大阪嵐三右衞門座。作者　近松門左衞門　水島四郎兵衞。出版者　京二條通正本屋九兵衞　大阪博勞町太左衞門梅筋藤九郎

と、悉くが違ふ。內容はやゝ趣向を異へてゐるが、同狂言の同趣向を何れかが踏襲した事は明かである。

近松の「佛の原」は、活字の飜刻があるから、こゝには略するが、私の異本の方について少し說明をしておかう。

異本の方では、題簽の「かたり」を見ると、

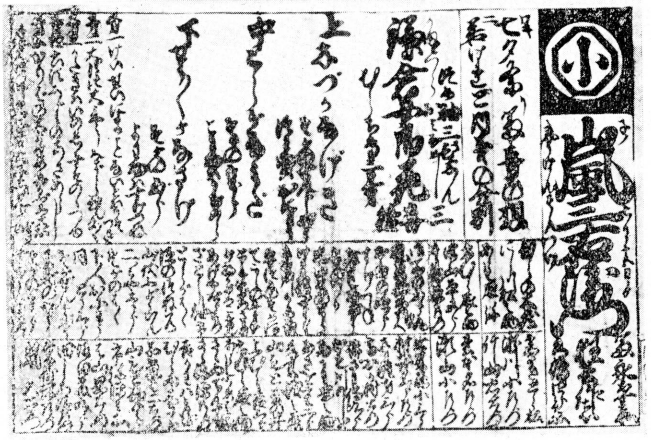
けいせい　ほとけのはら三番續

と右にあり、左には

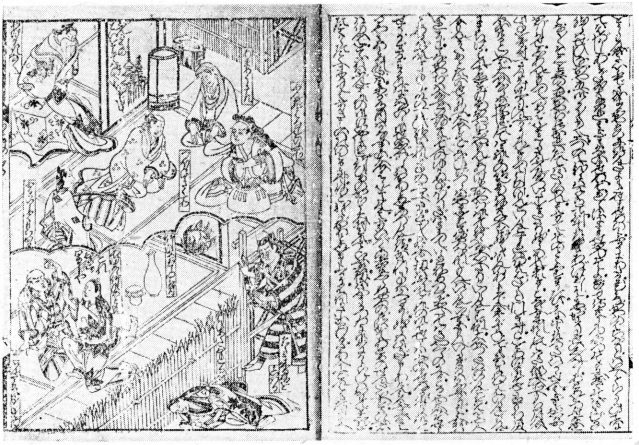
二千石の米はあげまき今川

とある。これで見て、近松の方の傾城奧州がこゝでは「揚卷」となつてゐる。主役の名も、近松

《『原の佛城傾』本異》



付番る見を載記のてしと者作言狂を衛兵郎四島水
（座一門衛右三嵐の年九祿元）



繪挿と文本の（作衛兵郎四島水）『原の佛城傾』本異

のは梅永文藏だが、異本は梅川文藏とある。共に三番續狂言であつて、近松の方は、

上　月の前の仇し女

中　窓の前のこも尺八

下　寺の前の迦陵頻

とあつて、上中下の、初めの一字づゝを取つて讀むと、「月窓寺」となり、丁度當時東山に越前國佛原山月窓寺の祕佛彌陀尊像の開帳があつたのを當込んでゐる。藝題の「佛の原」もこゝから出てゐる。又謠曲の「佛の原」にもならつたことは明かである。

「異本」の方を見ると、

上　大臣北國落　扨も見事なくらおき馬よ文はやりたしな紙子一貫

中　けいせい三夜待　爰はくぜつのまん中なればひがし口から四五間目の揚屋

下　けいせい掛念佛　とのもそくさい此身も無事でくにもゆたかにゑいこのさんさ

一重郎左衞門はかたい男其はづなぜにてつもん

一孫太夫は本けかへり其はづなぜに大あく人

一女郎二人の身うけは三國一ぢや

とある。役名と俳優名とを記しておかう。

一松岡監物娘たけ姫　嵐富五郎
一大村民部子一角　杉山勘太郎
一梅川文藏　太夫嵐三右衛門
一同弟帶刀　伊藤妻右衛門
一望月重郎左衛門　山下又四郎
一弟大介　中村四郎五郎
一妹おさき　松本三之亟
一櫻田庄八　上村平八
一勝浦友彌　中村袖之介
一乾孫太夫　三原十太夫
一尼妙三　吉川八兵衛
一局　松本小左衛門
一腰元小はる　嵐喜十郎
一女郎屋玉屋新兵衛　松本治左衛門

一揚屋柏屋作右衛門　松山平九郎
一太鼓又七　菊岡與治右衛門
一同源介　菊岡與治右衛門
一今川子宮松　南北市太郎
一傾城揚巻　玉川半太夫
一同奥州　嵐三四郎
一同若紫　淺尾くらの助
し同いま川　淺尾十次郎

と、これが役人替名である。

ところで、京の萬太夫座で世評嘖々の近松の佛の原を、大阪の嵐三右衛門ではいつ興行したのであるかと調べてみると、不思議にも同じ元祿十二年正月で嵐座の方はこの「佛の原」を前狂言にして、切には「石掛町心中」といふのを上演してゐる。

殆んど同時の元祿十二年正月に上演してゐるとすると、水島四郎兵衛といふ作者が、果して何者だらうか、京の方は正月廿四日の初日であるから、月末だ、大阪の方は初日が判らないが同じ正月であるとする、と殆んど同時の競演であらう。

大阪嵐座の作者、水島四郎兵衞とは何者であらうか。元祿十四年の三月に刊行された「役者略請狀」の京の卷の「立役の部」に

早雲作者　口上　水島四郎兵衞

とあるので、私は初めてこれが京早雲座の役者で、作者を兼ねた男である事を知つた。評判の方を見ると、「位付」に「口上」とあり紋所は丸に三つ鱗。

三ヶ津口上開山大入有てやかましき芝居も此人の口上にてとうざいといはねとしづまるは是妙有ゆゑなり、殊に狂言の作者御發明な御かたへ申はくだながら座本殿に夕霧の清左衞門の如く藤十郎にふるくとも紙子のやうなしぐみか、今嵐のせらるゝたいこのまぶ狂ひのやうな事が見たいと京中で風聞、ならぬ事かいの大臣見て どなたの札かは存ね共御ひいきゆへと見へましたがしぐみは時々の氣をうけていたす物一度よいとて定まらぬ事諸見物へ當るやうにと、それは〳〵しわんなさる事だとかく藝者の評判斗をおつしやてござれ

とある。恐らく、作者水島四郎兵衞に關するこれが唯一の記錄だらうと思ふ、その前後の評判記その後を繰つたがこの以上の記事を私は見出すことが出來なかつた。材料が乏しいが水島四郎兵衞は役者で作者を兼ね、口上がうまかつたといふ事だけは判る。

これ以上の記事を私は斷念して私の手の屆く限りの古番付を繰つてみると、作者としての水島四郎兵衞名の入つた古番付を一枚見つけた。それは、元祿九年の嵐三右衞門座の「鎌倉女郎花」三番續の番付で、それには狂言作者とあつて右に富永平兵衞、左に水島四郎兵衞とある。富永平兵衞は歌舞伎狂言作者として初めて名の見えた人で、こゝでは恐らく嵐三右衞門座の立作者の位置が富永平兵衞だとすれば水島四郎兵衞は二枚目であらうか。

これを以て見ても、昔は著作に對する權利などは、囂しくはいはないで、萬太夫座で興行すると殆んど同時に、原作者の近松は大阪の嵐座にも、そのまゝ與へ、嵐座では、京の早雲長太夫座の水島四郎兵衞に、加筆せしめて、同年同月に上演したものらしい、江戸の中村七三郎を倒したほどの狂言であれば、原作者の近松も可なり、自慢の趣向であつたと解せらるゝ證據は、例の淨るりの「天皷」――元祿十四年秋に竹本座に上演した「天皷」に、この梅永文藏の「二重の戀衣」文藏身の上話の趣向を、そのまゝに取入れてゐる。そしてこの「天皷」は、近松が宇治加賀掾のために執筆した元祿十二年の「丹州千年狐」の改題であるところから見ると、近松は、この文藏の身の上話しの件は、餘ほど得意のものであつたと見ていゝ。即ち、都萬太夫座と嵐三右衞門座の二歌舞伎に同時に上演すると共に、淨るりでも、加賀掾が語るといふ風に同じく元祿十二年に

三ケ所に殆んど同時に上演し、越えて又元祿十四年には竹本座と及び大阪嵐三右衞門座では「名殘の盃」と名題をおいて、水島四郎兵衞の異本「佛の原」を改題して上演してゐる。「名殘の盃」の番付は、米山堂複製の「元祿歌舞伎小唄番付盡」に收錄されてゐるから、この番付の繪と、近松歌舞伎狂言集の近松作の繪と、玆に揭げた異本の挿繪とを、同好の士は比較して御覽下さると私の話がよく會得されると思ふ。

もう一つ、原作者の近松門左衞門が得意であつたし、又世評もよかつた一例は、曾て大阪の古書展觀に出陳された中尾書店所藏の「好色一代男付り傾城廿三夜待」といふ淨るり本があつた。「好色一代男」といふに耽奇の目をみはつたが、第一丁を繙き開くとすぐにこれが「天皷」の拔粹であることが誰にでも判つたといふのは、綴込みのノドに「てんこ」の三字が歷々とある。この珍しい或は流行の「好色一代男」といふ名を冠らせて「佛の原」の影響の深いこの淨るり「天皷」の一件を別冊にしたことを以て見ても、近松も得意であつた世評も嘖々たるものがあつたことが判る。元祿十三年に、「梅川文藏の身の上話」、が西澤一風の「御前義經記」に拔粹されてゐるとこを以て見ると、この淨るり「好色一代男」もこの前後の刊行ではあるまいかと、私は想像してゐる。